
いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ～

イグス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ～

【NZコード】

N8990Y

【作者名】

イグス

【あらすじ】

転生者、四ツ葉麗矢は突然いつか天魔の黒ウサギの世界に突然飛ばされた。

色々な能力が入りチート主人公

プロローグ（前書き）

初めまして、イグスです
暇と時間さえあれば小説書いていきたいと思います

プロローグ

此処は何処だ？

俺は辺りを見渡す、辺りは一面真っ白な世界だった
(それにしても面白い世界だな：何なんだ此処)

「やあやあ、こんにちは！君」

突然目の前に現れた白い服着た女性が現れた

「えっと…、どなたですか？」

「私？ 私は神様だよん」

「は…？ 今何て言った、『コイツ…

「だから、神様だつてば、後ついでに言つと此処あの世ね」

「（コイツエスパーかッ！）てかえつ！？ あの世！？」

「そう、あの世だよ、君は死んだんだよ、アタシが間違つて時妙無
くしちゃつた ごめんね！（てへつ）」
バシッ！！

俺は思いつきり神の頭をたたく、結構良い音したな…：

「痛いっ！ 何で叩くの！？」

「当たり前だろうが！ 何人の時妙無くしちゃつた だ！ふざけん
な！」

「まあまあ、落ち着いてよー、ちゃんと謝つてんじやん」

「お前から反省の色が見えない」

「そう？ 私なりに反省してるんだけど？」

「ソウデスカ」

何だろ？ この神様イラつかな…

「なあ、そう言えば、何で俺は天国にも地獄にも行かずにこんなと
こに居んだ？」

「あーそう言えば忘れてた、君を此処に呼んだ理由はね他の場所に
転生させるためだよ」

「転生だと？」

「そうだよー、アタシのせいで君の時妙無くしたんだしね、そんくらいはしないと、君の行きたい世界や場所ならどこでも～」

「そう言われてもね、んーそうだな…じゃあ「いつ天」の世界で一度行つてみたかったんだよな、いつ天の世界

「了解」、じゃあじやあどんな力が欲しい？」

「力？ 何個でもいいのか？」

「オマケテ何個でもいいよ～」

「そうか、なら…」

そう言つてポケットの中を探る、おつと有つた有つた

俺が中から出したのは紙と鉛筆そこに色々な能力を書いていく。

数分後、書き終わるとそれを神様に渡した

「ふむふむ、なるほどね～結構書いたね君、まあ問題ないけどさ」

なんか不安何だよな…この神様

「そうか、ならようしく頼む」

「了解」そんじゃ行つてらっしゃい～、良い人生を～

神はそう言つと、指を鳴らしたすると俺の視界が暗くなつた。

プロローグ（後書き）

誤字などありましたら、教えてください、ではではまた次で！

転校生（前書き）

今日は、イグスです
更新しましたー！
これからも頑張りたいと思います

転校生

俺は、目を覚ました。

(知らない、天上だ・・・)

俺は体を起こし、辺りを見渡す、どうやらこれは自分のへやのようだ、ん?

俺は、机に手紙が置いてあることに気が付く

「んー、何々? 神様から?」

やつほー! 神様だよん! この手紙はいつ天の世界に送ったのを報告するためにかいたぞー

後、今の君の状況を説明するとだねー、君は独り暮らしで、これから富坂高校に転校するんだよねー、だからまあ頑張ってこの世界で

第一の人生頑張ー! 以上! 神様からでしたー。

追伸、能力はちゃんと君の言う通りしたからね

「神様軽すぎるだろ・・・」

俺は読み終えると手紙を折り畳み時計を見ると、8時半を指していた

「つおー!? 結構ギリギリじゃね?」

俺はあわてて制服に着替えると「脇罪証明」を使って学校に向かった。

数分後

俺は教室の前にいる、あの後校長にあつて教室を案内されたら、まさかの黒鉄大兎がいるクラスに転入だよ、

「では、四ツ葉君、入ってきなさい」

お、先生から呼ばれたな、なんか緊張する俺はそう思いながら教室に入る

「四ツ葉春樹です、よろしくお願いいします

」
そう言って俺はにこやかスマイルをすると、数人の女子がの顔が赤くなつてた、何でだろ？

挨拶は、まずまずかな？ 席はつと・・・

「先生ー、黒鉄君の後ろが空いてるからそこでいいと思いまーす

一人の女子が言つと、先生も承諾したようなので俺は、黒鉄の後ろに座ると、

「俺、黒鉄大兎よろしくな！」

「俺は四ツ葉春樹だ、春樹でいいぜ？黒鉄も大兎でいいよな？」

「ああー！」

大兎結構いいやつだな、元気いいし

すると、大兎の隣の女子、時雨遙も自己紹介してきた。

「私、時雨遙よろしくね、四ツ葉君」

「よろしく、春樹でいいぜ？」

「なら、私も遙でいいよ」

ふむ、これでいつ天の主人公と、メインキャラクター一人と接触できた、後はヒメアに紅と未雷とセルジュとハスガか・・・、あ、後黒守と泉だけか、結構いるなー、まあなんとかなるか、そう言つてる内に昼休み

俺は死んでいた、なぜなら、クラスの女子が休み時間になつて毎回俺の周りに来て、四ツ葉はどんなことしてるの?とか、色々と質問攻めされて休める時間がなかつたからだ、まあ全部答えましたよ? 周りの男子からは、なんか睨まれるしさ、疲れたよ

そして俺は昼休みになると女子から囮まれる前に素早く教室から逃げ出して学校の自動販売機の前にいる、

「ああ、転校そつそつ、なんなんだこの疲労感・・・」

俺は自動販売機で「一ラを買ひつと、教室に戻ろつとする」と、「おい、貴様」

「ん?誰?」

「おー、貴様それを寄越せ」
俺は振り向くと、そこには紅月光がいた、すると

自動販売機を見る「一ラのボタンに売り切れと、書いてあった、どうやら俺の買ったので西後らしき、他の自動販売機を見るとじつやう」「一ラは売られてないらしい、すると俺は紅月光に言つた

「嫌だ」

ザンッ！

「うをおー！？」

月光は剣を鞘から抜き斬りかかってきた

何なんのこいつ！？　どんだけ「一ラがほしんだよ！
そう思いながら、俺は剣の攻撃をすりすりと避ける

「何故攻撃が当たらない、糞が、せつと寄越せ」

「いきなり、斬りかかる奴にやるかアホ！」

「誰がアホだ」

「お前だ！」

「俺は天才だ」

そう言いつつ、月光は攻撃をやめようとしない。

何！？　何なのコイツ、うざいんだけど！

俺は思いつきりバックステップをすると、そのまま全速力でその場
から離脱した。

「ちつ、逃がしたか・・・」

月光は剣を鞘かに納めるとその場を後にした

転校生（後書き）

こんな感じになってしまった。orz
やつぱり小説書くの難しいですね
頑張らないと！

疲れた（前書き）

今日は！イグスです
今日は短いです

疲れた

結局、俺は紅月光のせいで昼休みもろくに休めず午後の授業を受け、HRの真っ最中である。

「まさか、初日でこんなに疲れるとは・・・」

ただいま、俺机に顔を沈めて脱力中

「大丈夫？春樹君」

「ああー・・・遙、大丈夫に見えるか？春樹の奴」

「見えない・・・」

大兎と遙は優しいね、それにしても疲れた、マジ疲れた、女子に質問攻めされるは、月光には斬りかかるは本当に疲れた、HRが終わると俺は鞄を持ち

「俺帰るわー」

「おう、じゃあな春樹

「さよなら、春樹君」

「おー、大兎と遙じゃあなー」

そう言って手をふりながら教室を出て、「脅罪証明」で家まで戻る、

「あー、本当に疲れたな、それに腹減った」

俺は、キッチンに行き冷蔵庫を開ける

・・・何もない、あ・・・・買い出し行くか

俺は、制服から私服に着替えると家を出て近くのコンビニに行く

「今日は、弁当類とサラダだけでいいか・・・、おっと、明日の朝食も買わないとな」

色々食材を買ってコンビニから出ると、

ドンッ

誰かとぶつかつた

「おっと、済まん、大丈夫か?」

「うん、大丈夫だよ」

あれ? コイツもしかしてアンドゥーのハイライ?

「何々? 私の顔になんかついてる?」

「ああ、済まん、ほーっとしてただけ」

「ふーん、そなだ、あつそつと言えば、
ドクターペッパー買わなくけやー」

そう言つて、未霧はコンビニに入つていった

ふむ、以外と可愛かつたな、おつとそろそろ帰る・・・

原作へ

俺が転校してきて、一週間がたつた
あれからは何とかクラスには馴染み結構友達ができた、大兎と遙と
はメールアドレスを交換したりした、やつぱり関わってくるキャラ
だし、そう言えば俺の家と大兎たちの家が徒歩でが分くらいと意外
と近くにあつて驚いたな。

そんなことを思いながら俺は何時ものように登校する。

「ふあ～・・・、眠（あー、早く原作へ突入しないかなー）」

欠伸をしながら教室に入ると、クラスの友達が挨拶してくる。

「よ～、大兎、遙おはよー」

「おはよう、春樹君」

「うーす、春樹、ふあー眠」

「大兎、眠たそうだな」

「ふあ～、なんか最近睡魔が襲つてくるんだよな」

「もー、大兎最近夜更かしばかりしてるんじゃないの？」

遙はそろいながら、心配する

「大丈夫だつて、遙」

大兎は欠伸を噛み締めながら言つ

「そり言え、教室午後授業何だつけ？」

「今日は確か、家庭科と国語だよ、春樹君」

ん？もしかして今日大兎はヒメアと会つのか？

「サンキュー、遙」

俺は遙にお礼を言つと、席に付くと同時に先生が入ってきて朝礼が始まつた。

あれから六時間目、どうやら山田先生は原作どうり体調不良で休みのようだ、大兎も五時間目の途中から眠いについたらしい、六時間目の終わりのチャイムも鳴り、遙は大兎を時々見ては心配していた、俺も何度も揺さぶつたり叩いて起こそうとしたが反応無し、そしてHRも終わつた。

「それにしても起きないな、大兎」

「そうだね」

そう言つと、遙は大兎を揺さぶつた

「ねえ。ねえってばーそもそも起きてよ大兎。もうホームルーム、とっくに終わっちゃつたよ？」

「おーい、そろそろ起きろー」

あると

「うへん?」

「お、やつと起きた

大兎は、小ちくづめきながら、田を開けた。

「……………どした?」

「もお~、どしたじゃないでしょ~。大兎つてば、五時間田からずつと寝てるんだよ?先生が起こしても起きないし」

「…………へ?五時間田から?って、今何時?」

「三時一十分だぞ」

「つか~むつホームルーム終わってんじやん」

「だからもう言つてんじやん」

遙はあきれたとつな顔で言つ。

「嘘だろ?」

「嘘じやね?」

「マジ?」

「マジ?」

「…………あ～、机下げる方がいいよな？」

大兎が言つと、女子たちが当然でしょつがといつ顔で大兎を見て頷く、机を持ち上げると、

「ちょっと遙、春樹、なんでおこしてくくれないのよ？」

「何度も起こしました～」

「嘘つけ」

「逆に嘘ついてどうするよ？」

「じゃあなんで俺、起きないのよ？」

「そんなの知らないわよ。だいたい大兎つてば、山田先生が殴つても起きなかつたんだよ？そんな寝坊助私達ができるわけないじやん」

「や、山田怒つた？」

すると遙は神妙な顔で頷く。

俺は大兎のうしろで笑いをこらえてた。

や、やべ、大兎信じてる、くくく

「まじかよ！」

「なんてね～ん。うそうそ。今日は山田先生体調不良でお休みでし

た。」

「・・・ふつ、騙されてやんの」

「・・・おまえら、おじ殺すぞっ。」

「まつまつまつ。やつてみなでこ大兎君」

遙はそのまま立つと、左手のポーズを取る

「つて誰だよそれ」

「私の名前は、ジョン・キーなんだ」

「そんな奴居たつけ？」

「カンフーの人って、ジャッキーだろ？もししくは、ジョン・トか？」

「わかんない」

「もしかしたら、ジャッキーとジョン・シットを合わせてのジョン・キーじゃないのか？」

「まあ？」

「わかんないのならやんなよ」

大兎はあきれてためいきをばく、そのまま机に向かって掃除は終つており机を戻す

「やべー、俺寝すぎだ

「確かに寝すぎだな

俺がそうこうしていると、

「つお？ は？ おまえ、何すんの？」

遙が大兎の唇に着いたよだれを指で取っていた。

「え？ あ、よだれについてたから」

やつまつして、遙はよだれをぬぐおうとしていた。

「……いやいや待てって。えーと、そりゃ、まあへないか、なあ

春樹

何故じつに来る

俺はそう思いながら、机から本を出してよ

「華麗に無視すんなよ」

知るか！ 今その中に入ったら俺KYOUだろうが、周りの女子たちお前らみてるだろ
それで、久しぶりに買ってきましたソード

オンラインでも読ん

でみるか

数十ページまで読み終わると、せやあああああ！ と女子たちの悲鳴
が上がった
が無視する、それからドアが吹っ飛び男が倒れたのもスルーする。

やつぱり、ソード オンライン面白いわー、何回よんでも飽きない。

それから又、あやああああと今度は甘い声で叫ぶが俺にはどうでもいいことなのでスルー、本を読んでいる俺はどんなことでもスルーするのがもつとうだ！

すると、目の前に誰かが立つたがスルー・・・

「おい、貴様」

ピシッ、本を読んでいる俺は止まってしまった、何故なら今の声は以前自動販売機で聞いたことのある声だったからだ、俺はそーと本から目をはなし顔をあげるとそこには、俺に斬りかかってきた紅月光がいた

「・・・どちら様でしようか？」

俺は紅月光が嫌いだ、確かに俺は神様から貰ったスキルがあるが俺はコイツのこと嫌いだ、精神的にも物理的にもなんかイライラする

「もう忘れたか、肩が、とんだ肩だな」
紅はそう言つと、

鼻で笑い教室から出でていこうとする途上で止まり、

「肩、後で生徒会室に来い

そんだけいうと出でいった。

俺はそのまま机に顔を沈めた。

うわー、だるいよなんか脱力感が物凄く出てきた、何なのあいつだ
るいんですけど！

「大丈夫か？春樹」

「ダルイ、物凄くダルイ、まるで50キロの重りを背負つてグラウンド百周走らされたぐらいダルイ」

「そんなわけないだろ」

いやいやそれがそのくらい有るんだよ、ああ、生徒会室^へ行きたくな

「それにして、平凡な俺の人生とは、まるで正反対な奴だな」

平凡ね・・・、それが終わるとは知らないからな、大兎は

「もお～、大兎は平凡じゃないよ」

「平凡だろお」

「違ひつて」

「違わないつて」

大兎と遙は話している途中で俺は席を立つた

「あれ？どこ行くんだ？春樹」

「さつき、生徒会会長様から来いつて言われてただろ？だから行くんだよ、ダルイけど」

俺はそう言って、じゃあなつと後ろに手を降り教室から出ていった、

そしてすぐに「脇罪証明」を使い生徒会室の前まで行く。

波乱

俺は生徒会室の前まで来ている

(はあ、入ります)

俺は、ドアに手お当ててため息をつく、

「失礼します」

俺は、ドアを開けると、椅子に座る、紅月光がいた。

俺はドアを閉めると

「おい、貴様」

「……何ですか？」

俺は嫌そうな顔で月光を見る

「お前は一体何者だ？」

「なんのことですか？」

「とほけるな、俺がお前に斬りかかっていたときお前は全ての攻撃を避けていた、全部だ、そちら辺の肩ではあり得ない」

「……」

「貴様のことも調べさせて貰つたがなにも無かつた、もう一度いう、

貴様は何者だ

「隠してもしようがないし、簡単に言つと、規格外であり人外見たいな感じですかね？後、この学校について色々知っている軍とか聖地とか」

「・・・ふん、そうか」

紅はそう言つと、何もない話さなくなつた

え？ そんだけ？ 意外と驚かないし、それに終わつたんなら帰つていよね？

俺は入つてきたドアから出ようつとすると、

「おい、どこへ行く」

「もう用心終わつたから帰るんだけど」

「いつ誰が帰つていいと言つた」

うわー、何コイツ、
俺がそう思つていろと、

「ゲッコウーただいまーー」

ドアが開き誰か入つてきたよ

「遅いぞ、雑魚」

「雑魚じゃないいいいい！ってあれ？知らない人いる？」

「コイツは今日から生徒会に入る奴だな」

は？今何て言つた

「誰が生徒会に入るって言いました？」

「お前だ雑魚」

何！？

「俺は「お前に拒否権は無い」・・・？」

はあ、原作より「ひどくないか？」コイツ

「つたく、わかつたよ、入ればいいんだる、入れば

「ふん、最初からそう言えばいいんだ」

「なになに？どうなつたの？」

「うるさい、雑魚」

「雑魚じゃないいいいい！」

「疲れた、寝る」

紅は未雷を無視して、腕をくみ田をつむる。

「無視すんなあ あああああー！」

「睡眠の邪魔する」とおしゃかいやりんぐ

「・・・」

未雷は紅に言われるとすぐ黙った。

「どんだけだよ」

未雷は紅に言われるといつもあんな感じじ？

「あ、俺四ツ葉春樹よろしく」

「安藤未雷だよ、よろしく」

「なあ、月光つていつもあんな感じじ？」

「うそ、やうだよ」

「ふーん」

「おー、お前」

俺と未雷が話していると紅が呼んだ

「なんだ？月光」

「来るぞ」

紅がそつまつと同時に。

ドン！

といづ音がした。

それに彼らは、

横を見ると数人の影があり窓を銃で殴つてゐる姿がうつつた

「紅月光！君は包围されているーおとなしく投稿するなら、命まで奪わない。扉を開けて、出できなさい！」

なんて声が聞こえる。

そして無理矢理、力業で扉を開けようとしている、それに月光は「そんなんじゃ開かないよ、その扉は。すでに術で封としてある。専門の解呪屋でも呼んで来ない限り、その扉は開かない」

すると外にいる男が言った。

「解呪屋はもう手配した。扉が開くのは時間の問題だ。だが、その前に投稿すべきだ。自分の命が大切・・・」

「おい、四ツ葉」

紅は外の男を無視していつ

「ん？何」

まあ俺も外の声は無視してるけどな、どうでも良いし。

「外の足止め出来るか？少し用事がある」

「もしかして信頼してる？それってつまり、生徒会の仕事？それとも俺のこと試してる？」

「両方だ、それに「拒否権は無いだろ？」・・・そうだ」

「まあ、數十分は出来るかな？」

「分かった、あとは頼む、未雷行くぞ」

月光はそう言つと、未雷を呼び聖地を開きそのなかに消えると穴も消える、俺は机の上に座る、同時に扉が開き軍の人が武器を構えて入ってくる

「紅月光はどうだ！」

軍の一人が言つ。

「残念ながら一足先に行きましたよ？」

「ほう、なら場所を教えてもらおうか

「残念ながら俺会長に足止めをしつけて言われたんですよー、だから教えるわけには行きません」

「そりゃ、なら力ずくでも聞かせてもらわないとな」

「そう言つと、軍の人たちは銃を構えるが

「【グラビティ】」

俺はそう一言言いつと俺以外の軍の人たちが地面にひれ伏す。

「があ！」

「あーすいません少し強くし過ぎたかも知れませんね」

「化け物め！」

「化け物？違うぜ？ただの人外だよ」

そう言って俺は机から降りると、

「あ、その力あと三十分続きますんで」

そう言って俺は「脇罪証明」で大鬼たちがいる公園へ移動する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8990y/>

いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ～

2011年12月1日16時54分発行